副詞の共起の傾向性と意味
——「キット／タブン／モシカスルト」を対象に——

張　根　壽

キーワード：副詞、モダリティ、確信、不確実、可能性

要　旨

日本語の副詞の中には、「キット／タブン／モシカスルト」のように、文末にいわゆる推量表現を伴うものがある。これらの副詞は、話し手の主観性を表すものとして、命題成立の蓋然性というスケール上、連続するものとして処理されてきた。しかも、文末のモダリティの意味を記述するためのテストとして用いられるなど、個々の副詞の具体的な意味・用法の分析が行われないまま、副詞の意味は共起関係にある文末形式の意味と同様なものとして扱われてきた。本稿ではこのような問題提起の上、「キット／タブン／モシカスルト」の共起の傾向性の調査に基づき、個々の副詞が持っている固有の意味機能と共起現象がどのように関わっているか、という問題を明らかにした。

1. はじめに

日本語の文は「命題(proposition)」と「モダリティ(modality)」という二つの部分からなるものと考えられる。本稿で考察する副詞は、文のモダリティの部分に作用し、話し手の心的態度という主観性を表現するものである。特に「キット／タブン／モシカスルト」は、文末に推量表現を伴う典型例として、その呼応現象が注目されてきた*1。たとえば、従来の研究で「キット／タブン」は、ゼロ形式や「ダロウ」と、「モシカスルト／ヒョットスルト」は「カモシレナイ」と呼応するとされ、副詞の意味解釈も呼応関係から捉えられてきた。そのため、個々の副詞に関する十分

*1　推量的意味を表す副詞としては、「ドウモ／ドウヤラ」も挙げられる。但し「ドウモ／ドウヤラ」は、証拠性(evidentiality)を表す副詞であり、蓋然性(probability)を表す副詞と系列的(paradigmatic)な関係にあるとは言えないので、本稿では扱わない。

な検討が成されることなく、副詞の意味は呼応関係にあるモダリティ形式の意味と同一視されてきた。しかも、呼応する文末形式の意味の違いに準じて、命題成立の蓋然性や確信度という基準に並ぶものと規定されてきた。

本稿では副詞研究におけるこのような問題点を指摘し、個々の副詞のより詳細な意味・用法を記述する必要性を主張する。その手順として、2 節では、これらの副詞類が文末にどのような形式とどれだけ共起しているか、という傾向性を把握する。3 節では、これらの副詞に関する先行研究を概観し、「キット／タブン／モシカスルト」が持つ主観性を確認する。4 節では、2 節で調査した傾向性に基づいて、それぞれの副詞の意味・用法を記述し、5 節で結論をまとめる。

2. 副詞の共起の傾向性

本稿で分析の対象とする副詞は、それぞれの副詞の意味機能の違いによって、共起関係のパターンも異なってくる。したがって、文末のどのような表現形式と共起するかを分析することによって、副詞が持つ意味機能を把握することも可能であると思われる。そこで、副詞の共起関係を対象とした調査を行い、個々の副詞がどういう形式とどれだけ共起しているかという共起の分布を数値的に示す。

表 1　副詞と文末形式との共起関係

文末形式 ＼ 副詞(計)	スルφ	名詞＋ダ	ノダ	ヨウダ	ラシイ	ハズダ	カモシレナイ	ニチガイナイ	ダロウ・マイ	ト思ウ	ノデハナイカ	ダロウカ
キット(667)	212	6	84	2	1	13	12	94	202	31	8	2
タブン(399)	41	7	20	4	3	7	8	14	217	56	22	
オソラク(583)	61	10	22	7	6	7	12	71	337	21	21	8
モシカスルト(151)	8		4				96		3		32	8
ヒョットスルト(114)	6						66				35	7

・用例は新潮文庫の 100 冊(CD-ROM 版)の中、日本人作家の作品から集めた。
・「名詞＋ダ」は「トコロダ・ワケダ・モノダ・コトダ」など「形式名詞＋ダ」を含む。
・文末形式は代表形を取る。たとえば「ダロウ」は「ノダロウ」「デショウ」「ダロウト思ウ」などを含む。
・「ノデハナイカ」は「デハナイカ」「ノデハナイ(ダロウ)カ」など否定疑問を含む。
・「ダロウカ」は「カ」「カナ」「カシラ」などを含む。
・述語部分が省略された用例は計の中に数えていない。但し、倒置文は含む。

ここではまず、これらの副詞はなぜモダリティ形式と共起するかという本質的な問題について考える。話し手がある命題の実現を認識する際、それを確かなものとして捉えるか(確認されたものとして捉えるか)、不確かなものとして捉えるか(確認されていないものとして捉えるか)によって、文末に用いられる表現形式は「断定(確言)」と「推量(概言)」とに分かれる[*2]。

これらの副詞に共通して見られる意味特徴は、話者の事態に対する不確かな態度を表すものであり、不確かさの理由は、事態の未確認(未確定)に起因するものと考えられる。すなわち、話者は事態の成立をまだ確認していないので、文末に断定形[*3]や「ニチガイナイ」を用いて確信の気持ちを述べたり、「ダロウ」を補って推量判断したり、「カモシレナイ」を用いてその可能性が存在するといった態度を表明する必要がある[*4]。

副詞が文末の表現形式と共起関係を結ぶ理由は、副詞とモダリティの間の意味の整合性によるものであり、副詞が持つ意味はモダリティとの共起関係にも影響を与えると言える。表 1 で確認したように「キット／タブン／モシカスルト」は、文末の様々な表現形式と共起することができるが、中でもある特定の形式と共起する割合が高い。それは、副詞とモダリティ形式がもっとも整合しやすい意味関係にあるからと解釈され、そのような共起現象を仮に副詞が持つ基本的用法と規定することも可能であると思われる。

しかしながら、副詞の共起現象には、非基本的用法、あるいは基本的用法から派生した二次的用法も存在する。副詞の意味機能と共起現象との関係を究明するためには、両方の用法を考察の対象とする必要がある。

---

*2 「断定(確言)」と「推量(概言)」の対立については、奥田(1984, 1985)、寺村(1984)、仁田(1989)、益岡(1991)などを参照されたい。

*3 田野村(1990)は、平叙文の下位分類として、次の(i)のように判断を表すもの(推量判断実践文)と、(ii)のように判断を表さないもの(知識表現文)があると指摘している。

(i) (アノ風体カラスルト) あの男はヤクザだ。

(ii) (君ハシラナイダロウガ) あの男はヤクザだ。 田野村(1990：785)

ここで言う断定とは、田野村の「推量判断実践文」に対応するものである。

*4 文末に様々なモダリティ形式が付着するのは、日本語が膠着言語であるからと考えられる。同様な現象が同じ膠着言語である韓国語においても確認される。

3. 先行研究と副詞の位置づけ

本節では、これらの副詞類が従来どのように分類されてきたかを概観し、その位置づけの問題について触れる。

澤田(1978)は、英語と日本語の対照言語の観点から、「文副詞(sentence adverbs)」(Greenbaum 1969、Quirk, et al 1972の「態度離接詞(attitudinal disjucts)」と同じ範疇の副詞)を「認識的(epistemic)な副詞」と「態度的(attitudinal)な副詞」に分けている。「きっと」「たぶん」「もしかすると」などの副詞は、「認識的な副詞」に属し、命題の起こる度合い(probability)の違いを表すものであると述べている。

日英語の副詞を比較した研究としては、中右(1980)も挙げられる。これらの副詞類は、命題の外側にある「命題外副詞」であり、その sub-category の「真偽判断の副詞」として位置づけられている。「真偽判断の副詞」は「命題内容の真偽の度合いについて、話者が発話時において下す査定的判断を示す(中右 1980：195)」ものであるとしている。

次に、日本語の副詞を対象とした研究として、工藤(1982,2000)は「現実認識的な叙法副詞」のカテゴリーの中に推量的な副詞群を次の四つに分けている。

① 確信：きっと　かならず　ぜったい(に)

② 推測：おそらく　たぶん　さぞ　おおかた　etc.

③ 推定：どうやら　どうも　よほど

④ 不確定：あるいは　もしかすれば　ひょっとしたら　etc.　工藤(1982：65)

上の四種の相互関係は、二つの面で連続的な関係にあると指摘している。一つ目は、対象面から言えば事態実現の確実さ(蓋然性)、作用面から言えば話し手の確信の度合いの連続性であり、二つ目は、叙法性の強弱による連続性である。いずれも①から④の方向で低くなっていくと述べている。

これらの副詞類を連続的に捉える立場は、森本(1994)においても同様である。「きっと」「たぶん」「もしかすると」は、話し手の主観を表す副詞の中の蓋然性の程度(話し手の信念の程度)の違いを表す副詞であると認めている。

以上の先行研究で共通しているのは、これらの副詞が話者の心的態度というモダリティに働く副詞であり、蓋然性というスケールから見て連続するという点である。本節では、これらの副詞類が持っている主観性(辞性・叙法性)を確認するため、工藤(1982)の「基本叙法」と「副次叙法」を参考にする。モダリティ形式には、常に主観性を実現するもの(基本叙法)と、客観的表現になり得るもの(副次叙法)がある。「副次叙法」とは、(1)～(6)のように副詞が連体節内の推量的意味を表したり、文

末のモダリティ表現が過去形を取る、といった用法を持つものである[*5]。

(1) 「でも、かわりにきっとよろこんでいただけるお料理を用意してまいりました」 (井上ひさし「ぶんとふん」)
(2) 話せば今ならきっと分って貰れたに違いなかった。 (渡辺淳一「花埋み」)
(3) 多分入っていないと思われる大学入試の発表の朝のうっとうしさを表現するのに、今の言葉は実に不適当であった。 (曽野綾子「太郎物語」)
(4) そしてそれは老人が予言したように、僕にとってもおそらく長く辛い季節になるはずだった。(村上春樹「世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド」)
(5) 「ジム。もしかしたら来るかもしれないようなことを言ってたでしょ。だからうちのやつに会わせたいと思って」 (沢木耕太郎「一瞬の夏」)
(6) 加藤は出産費がどのくらいかかるかは知らなかった。ひょっとすると百円も二百円もかかるかも知れなかった。 (新田次郎「孤高の人」)

(1)(3)(5)は、副詞が連体節内の推量的意味を表す例であり、(2)(4)(6)は文末の形式が過去形を取る例である。南(1974)が従属句に現れ得る諸要素の段階に準じて、名詞句の構造も A から D の段階を設けていることから、連体節内に用いられる例を詳しく見ていくと、(3)は名詞句の中に「～と思われる」が生起しており、(5)の場合も「～かもしれないというようなこと」に言い換えられる。この意味で(3)と(5)の例は C の段階の名詞句と処理すべきかもしれないが、本稿では一律に連体節内の判断を表す例として認める。

続いて、南(1974)の従属句の研究によると、「キット／タブン」などの主観性の強い副詞は、「～ガ、～カラ、～ケレド、～シ」のような C 類の従属句に現れるという指摘がある。しかし用例数は少ないものの、上の副詞類が「～ノデ、～ノニ、～タラ、～ナラ」などの B 類の従属句に出現する例も観察された。それぞれの副詞が連体節、過去形、B 類の従属句に用いられる割合を表2にまとめる。

*5 「基本叙法」と「副次叙法」は、仁田(1989)の「真性モダリティ」「疑似モダリティ」、益岡(1991)の「一次的モダリティ」「二次的モダリティ」に対応するものである。「副次叙法」には、さらにモダリティ形式が否定形になるもの、話し手以外の心的態度を表すものがあるが、今回の調査には含まれていない。

表2　副次叙法に現れる副詞の割合

	連体節	過去形	B類	
キット	12	6	1	19(2.8%)
タブン	9	4	1	14(3.5%)
オソラク	32	7	3	42(7.2%)
モシカスルト	3	2	4	9(6%)
ヒョットスルト	2	3	1	6(5.3%)

工藤(1982)の推量的な副詞群の分析によると、「きっと」「多分」「恐らく」は「基本叙法」の副詞、「もしかすると」「ひょっとすると」は「副次叙法」の副詞として分類されている。しかし本稿の調査を見る限り、上の副詞類の叙法性はほぼ変わりがなく、叙法性の強弱による連続性は認められないといって良いと思われる。以下、表1と表2の数値を参考にしながら、共起現象をもたらす副詞の意味を記述する。

4. 副詞の意味・用法

4.1. 「キット」

工藤(1982：75)は「キット」に関して、次の三つの意味があると指摘している。一つ目は、「特定の事態の存在・実現(あるいは、事態の説明)の確実さについての、話し手の確信」、二つ目は「まだ実現されていないことがらが、確実に実現されることを期待する話し手の気持ち」、三つ目は「一定の条件のもとに一定のことがらが、ほとんど例外なくくりかえされる確率性」である。

以下、この三つの意味を「話し手の確信」「期待の気持ち」「事態の確率性」と呼び、「キット」の多義性と共起関係について検討する。まず「話し手の確信」から見ると、「キット」は形態的に断定形と共起する割合がもっとも高い。表1で断定形と共起する例は、667例の中212例(31.8%)である。(表1の「キット」の用例数は「話し手の確信」の意味を表す例のみを数えた)

(7) そう自分に言い聞かせるような口調で呟き、「お前は優しい子やから、きっと、しあわせになる」と言いました。　(宮本輝「錦繍」)

(8) 「隆士にいさん。ふじ子さんはきっとなおります。必ず丈夫になります」　(三浦綾子「塩狩峠」)

(9) 「それなら、今さらどうして本当の殺人犯になろうとするんですか？　無実なら、きっと容疑が晴れます」　(赤川次郎「女社長に乾杯！」)

(7)から(9)の「キット」は無標の断定と共起し、話し手にとってはまだ確認されていない事態を確信的に捉えている意味を表している。たとえば、(7)(8)は相手や第三者の未来のことに対する予想を、(9)は条件の世界における命題の成立を確信を持って述べている。

ここで、断定と共起する用例数を他の副詞と比較してみると、「タブン」は 399 例の中 41 例(10.3%)、「オソラク」は 583 例の中 61 例(10.5%)である。断定と共起する割合が「タブン／オソラク」に比べて高いということは、「キット」がそれだけ命題成立に対する確信の度合いが高いことを示していると解釈される。

未確認の事態を言及するためには、文末にモダリティ形式を伴うことも想定される。「キット」と共起する文末の表現形式は、「ダロウ」が 202 例(30.3%)、「ニチガイナイ」が 94 例(14.1%)、判断のモダリティとして機能する「ト思ウ*6」が 31 例(4.6%)の順である。たとえば、

(10) 首輪をつけているのだから、きっとこの家に飼われている猫なのであろうと思い、私は追い払うつもりで枕をつかんで投げつけようとしたのです。
(「錦繍」)

(11) もちろんいま断定はできないが、判決はきっと有利なものになるにちがいない。
(星新一「人民は弱し 官吏は強し」)

(12) 「僕が許しても許さなくても、そんなことは君のおじいさんにとってはきっと関係ないと思うよ」と私は答えた。
(「世界の終り」)

(10)は[首輪ヲツケテイル]コトを根拠・理由に[コノ家ニ飼ワレテイル猫ナノダ]ということを推測判断している。(11)は「ニチガイナイ」を伴い、事態の実現に対する話者の確信的態度を、(12)は今現在、話者にとって確認できない文の主語のことを確信的に述べている。

以上の例の「キット」は、話者の確信の度合いに違いが生じるものの「タブン／オソラク」に置き換えが可能である。この点から「話し手の確信」の意味の「キッ

*6 「ト思ウ」は、「ト思ワレル」「ト思ッタ」「ヨウニ思ウ」「ト思エル」「ト考エル」「ト推測サレル」「ト想像スル」などを含む。「ト思ウ」は、一人称、非過去、非否定の条件で判断のモダリティへ形式化する(仁田 1989 参照)。この意味で「ト思ッタ」は、判断のモダリティへ形式化したものではないが、分類の便宜上「ト思ウ」に含む。

ト」と「タブン／オソラク」は、同じカテゴリーに属する副詞であると考えられる。

一方で、「期待の気持ち」と「事態の確率性」の意味は「タブン／オソラク」の用例には見られず、両者の副詞を連続的に捉えることはできない[*7]。「キット」を多義性の副詞と捉える根拠でもあると思われる。まず「期待の気持ち」は、

(13) 「きっとこの借りは返すわよ」 (「ぶんとふん」)

(14) おやじの借金なんか、耳をそろえて返してやる。東京へ行って、立派な人間になり、きっと、たたき返してやる。 (山本有三「路傍の石」)

(15) 「……あしたから子供たちも淋しいでしょうね。でもまたきっと会いましょうね。手紙も時々くださいね。私たち、誰もあなたのこと忘れないから。いつまでも」 (藤原正彦「若き数学者のアメリカ」)

(16) 「おい加藤、二次会を逃げちゃあいけないぞ、あとできっとあそこへ来いよ」 (「孤高の人」)

(13)(14)のように動詞の非過去形で未来に行う話し手の決意・意志を表すものが53例、(15)のように勧誘形、あるいは意志の「ウ／ヨウ」と共起するものが5例、(16)のように命令文に現れるものが6例である。

次に、「事態の確率性」の用例は42例が見つかった。

(17) 兵隊はどこに行っても、暇ができると、きっと誰かが楽器をつくります。 (竹山道雄「ビルマの竪琴」)

(18) 事実、彼が指揮をすると、きっと勝ってしまうのだ。 (「路傍の石」)

(19) 診察、往診に追われるなかで、吟子はこの会の集まりにだけはどんなに忙しくてもきっと出席した。 (「花埋み」)

---

*7 「タブン」の場合も動詞の非過去形で話し手の意志(意図)を表すことができる。

(i) A：来週の木曜日歓迎会がありますけど、来ますか？

B：たぶん行きます。

(ii)「(略) 多分、着いたらすぐ口座を作り知らせるから、その時、指定するだけ、送って欲しい。…」 (「若き数学者のアメリカ」)

上の例は「タブン」の境界的な例として位置づけられる。「タブン」は「キット」とは違って、命令文や「ウ／ヨウ」とは共起しない点で、その本質は異なると言える。

(17)～(19)の「キット」は、「～デキルト」「～スルト」「～ダケハ」のような一定の条件のもとに、命題が例外なく成立するという意味を表している。但し、「事態の確率性」に現れる「キット」はその判定が微妙な例も多く、その成立条件などはさらに詳しい分析が必要であると思われる。

以上のように、「キット」は大きく三つの意味・用法を備えていると言えるが、これらをどのように捉えれば良いかという問題がある。

まず、三つの意味・用法に共通する統一的な意味を求める方法がある。この場合「キット」の意味は、やはり「事態の(高い)確率性」に求めるべきであろう。しかし「キット」の意味を「事態の確率性」と規定した場合、意味的に類似する「カナラズ」「キマッテ」などの副詞との意味の区別が曖昧になる。と同時に、「キット」が持っている主観性(叙法性・modality)というものが薄れてしまう。結局、副詞の本義を追求する方法においては、「キット」が「タブン／オソラク」と同様、真偽判断を表す主観性の副詞であるという説明は難しくなる。

次に「キット」を三つの異なる意味・用法を持つ副詞として捉えることも可能である。この場合、一つの形態を持つ副詞が用法上の区別によって、三つの意味を持つ別の副詞として処理されることになる。実際、副詞の中には「カナラズ／ゼッタイニ」などのように認識面と当為面の両方に用いられるものがある。副詞の用法の違いを重視した捉え方では、これらの副詞はすべて二つの意味・用法を持つ別の副詞として処理しなければならない。

最後に「話し手の確信」と「期待の気持ち」は、それぞれ認識的・当為的なモダリティに関わるものと扱い、「事態の確率性」は、特定のモダリティが存在しない、あるいはモダリティの意味が薄れたものと処理する方法も考えられる。この場合は「キット」を二つのモダリティを持つ副詞として考えねばならないということになるが、はたして両者(認識的・当為的)を同等に扱っていいのだろうか、という疑問が残る。

上の三つの解釈の仕方は、それぞれ問題点を抱えているが、本稿では「キット」の意味を三つ目の方法で説明する。その理由は、「キット」が持っている認識的・当為的なモダリティが認められるからである。但し、二つのモダリティを同等に扱うわけにはいかない。「話し手の確信(667 例)」と「期待の気持ち(64 例)」は、明らかに使用の頻度に差が見られるからである。この使用の頻度の偏りから、「キット」が持つ基本的意味を「話し手の確信」と考える。そして「期待の気持ち(64 例)」「事態の確率性(42 例)」の用法は、「話し手の確信」という意味から派生した二次

的用法として処理する[*8]。

これらの二つの用法を二次的と考えるもう一つの根拠は、「期待」と「確率」に用いられる「キット」は否定文に現れにくいという文法的特徴があるからである。基本的に肯定と否定の制約がない「確信」の意味とは区別できる。

「キット」と類義関係にある副詞としては「カナラズ」「ゼッタイニ」などがある。「キット」が持つ「確信」「期待」「確率」という意味・用法は「カナラズ」においても観察され、そして「確信」「期待」は「ゼッタイニ」にも見られる。このような現象から、「確信」「期待」「確率」の意味は排他的でなく、相互連続的に捉えられることを傍証すると考えられる[*9]。

4.2. 「タブン／オソラク」

従来「タブン／オソラク[*10]」は、しばしば述語部に「ダロウ」という推量表現を伴うと指摘されてきた。「ダロウ」と共起する用例数は「タブン」が 399 例中 217 例(54.4%)、「オソラク」は 583 例中 337 例(57.8%)であり、「ダロウ」との共起率がもっとも高い。具体例を見ると、

(20) 今日でなければ、たぶん明日、男は誰かに打ち明けてしまっていることだろう。 (安部公房「砂の女」)

(21) 風速四十メートルを越える風の中で火が出たとしたら、おそらく所員は逃げ場を失うであろう。 (「孤高の人」)

(20)は三人称主語である[男]の未来に行う出来事を予測し、(21)は条件の世界にお

---

*8 使用の頻度が副詞の意味を決定づける要因であることは単純に片づけられる問題ではない。なぜなら、本稿では主に小説を資料としているため、(真偽)判断文のような平叙文の方が意志表出文や命令文より出現頻度が高いと考えられるからである。この意味で「話し手の確信」と同様、平叙文に現れる「事態の確率性」は、使用頻度から考えて二次的であると言える。

*9 本稿の「きっと」の意味は、呉(1999)の研究と一部重なる部分がある。その議論を含め、「キット／カナラズ／ゼッタイニ」などの副詞の多義性については別稿で論じる。

*10 以下、「タブン／オソラク」は話し手の不確実性判断を表すという意味で同じレベルの副詞として扱い、交代可能なものとして論を進めていく。

ける命題成立を推測的に表している。(20)(21)は、上下に分離されている副詞と文末の「ダロウ」が意味的に融合し、話し手の推量判断を表明していると言える。従来「タブン／オソラク」が推量を表す副詞と記述されてきたのも「ダロウ」との共起関係に起因するものであろう*11。

ところが、表 1 から確認されるように、「タブン／オソラク」は「ダロウ」の他にも多様な表現形式との共起現象が見られる。たとえば、「ト思ウ」「カモシレナイ」「ニチガイナイ」「ハズダ」「ノデハナイカ」のような形式を伴うこともできる。

(22) 「それでは、ご要望に答えて、たくさん、どっさり宿題を差し上げます。多分皆様にご満足して頂けると思いますが」 (「若き数学者のアメリカ」)

(23) だがたぶんいまの未紀はこのことばを知らない(忘れている)かもしれないとぼくはおもった。 (倉橋由美子「聖少女」)

(24) おそらくその喪失感は僕の失われた記憶とどこかで結びついているのに違いないと僕は推測した。 (「世界の終り」)

(25) しかし、恐らく彼にとっての真の儀式はとうに終っていたはずなのだ。 (「一瞬の夏」)

(26) これはたぶん、自分が大学院生なみ、もしくは同程度と見なされているのではないか、という妄想によったものだろう。 (「若き数学者のアメリカ」)

まず(24)の「ニチガイナイ」との共起率に注目してみると、「タブン」は 14 例(3.5%)、「オソラク」は 71 例(12.2%)が「ニチガイナイ」と共起する。確信の度合いという意味で連続性が見られる「キット」の場合は、「ニチガイナイ」と共起する例が 94 例(14.1%)確認された。副詞と「ニチガイナイ」との共起率の違いは、これらの副詞の意味的な違いを説明する手がかりになるとも考えられるが、今は現象の指摘だけに止める。「ニチガイナイ」との共起率からみた話し手の確信の度合いは「キット」「オソラク」「タブン」の順になる。

次に「タブン／オソラク」は、(26)のように相手に情報要求を義務としない否定疑問文にも出現することもできる。「タブン」は 22 例(5.5%)、「オソラク」は 21 例

*11 推量の意味は三宅(1995)を参考にした。三宅は「推量」を表す形式を「ダロウ／マイ／ウ／ヨウ」に限定し、「推量」は「話し手の想像の中で命題を真であると認識する」ものであると述べている。

(3.6%)が「ノデハナイ(ダロウ)カ」と共起関係を結ぶ。「キット／タブン」のような副詞は、事態を推論や思考・想像などの働きによって把握しながらも、その成立を主張する意味を持つものであって、基本的な疑問文(質問文)には生起にくいと言える。一方、否定疑問文は相手に情報を要求することなく、命題成立に対する話者の疑念の意を表すことができる。(26)は、副詞と否定疑問文は不確実性という共通の意味を備えているのが共起成立の要因であると考えられる。

以上の例は副詞と有標のモダリティとの共起関係を示すものであるが、「タブン／オソラク」は無標の断定や「ノダ」文にも出現することができる。

(27) 彼女は多分、登美子の母が生きているうちから、父の妾だった。母は晩年は不幸であったに違いない。 (石川達三「青春の挽歌」)

(28) おそらく、誰も知らないが、安田は佐山とお時と三人で、どこかで何回も会ったことがあるのです。 (松本清張「点と線」)

(29) なんだって、あんなに、コースを外れてしまったのだろう？ おそらく、斜面をさけようとしすぎて、かえって、あんな不手際をしでかしてしまったのだ。 (「砂の女」)

(27)(28)はそれぞれ文末が過去形、非過去形を取っているが、文全体の意味は事態成立への不確かさを表している。一般に、断定形で話者の不確かな気持ちを表す場合は文末が非過去形を取るが、名詞述語文、あるいは文末に終助詞が付着するなどの文脈条件を整えることによって過去形も許容されるようになる。そして(29)の「オソラク」は「ノダ」文に現れ、前文の疑問に対して、原因・理由などの理由づけを不確かながらも断定的に述べている。

ここで「タブン／オソラク」の共起関係を整理すると、これらの副詞は「ダロウ」と共起する割合が高いが、(22)～(26)のような有標の表現形式、あるいは(27)～(29)の断定、「ノダ」と共起する例も確認できる。これらの例から「タブン／オソラク」は、推量のみを表す副詞ではないことが窺われるが、中には文末を「ダロウ」に置き換えたり、「ダロウ」を付け加えたりすると推量の意味を表せる例もたしかに存在する。この意味で一見、「タブン／オソラク」は推量、もしくは推量に近い意味機能を備えているとも言える。

ところが、「タブン／オソラク」が常に推量的意味を表すものではないということは、(30)～(33)の例で確かめられる。下線部の副詞は「ト思ウ」、あるいは断定

と共起し、話者の記憶の中に内在する情報を不確かに捉えている[*12]。

(30) 「そうですね。電報の内容はよくおぼえていませんが、たしかに浅虫の近くの小湾あたりで札幌の電報を頼まれた記憶があります。たぶん、一月二十一日の朝だったと思います。その前後には、その付近で電報を頼まれた覚えがありませんから」 (「点と線」)

(31) おそらく最も多く浴びせられたのは、そんな質問だったように思う。 (五木寛之「風に吹かれて」)

(32) 言われるその日のうちに承知したかどうか、多分確答を避けたと記憶するが、間もなく「文芸朝日」のスタッフが替り、私にとって東大国文科の先輩にあたる井沢淳さんが編集次長になった。 (阿川弘之「山本五十六」)

(33) よく覚えてはいませんが、おそらく去年の夏のことです。

(30)(31)は文末に「ト思ウ」を補い、(32)(33)は断定形を取っているが、「ト思ウ」を「ダロウ」に置き換えたり、文末に「ダロウ」を加えたりすることはできない。そうすると、文の意味が記憶情報の表明から推量に変わってしまう。「ダロウ」は記憶を呼び起こしての判断ではなく、もっぱら想像による判断を表すものであるからと言える。また、次の例からも同様なことが言える。たとえば、

(34) (夫が妻に電話をする場面)
今日は会議があるから、たぶん遅くなると思う。

(35) A：来週の木曜日歓迎会がありますけど、来ますか？
B：たぶん行きます。（＝注7）

---

*12 「タブン／オソラク」が「ト思ウ」を伴い、話者の記憶を呼び起こしての判断を表すという現象は、森田(1988)、森山(1995)などで指摘されているが、断定と共起する場合も記憶情報を表明することができるという点が従来の研究と異なる。また、「タブン／オソラク」に比べて用例数は少ないが、「キット」も話者の記憶情報を表すことができる。この現象からも両者の副詞の連続性を確かめることができる。

(i)「いつだったかしらね。以前、エディさんが私にこんなことを言っていたことがあるわ。昔よ。きっと内藤が全盛の頃だわ。内藤は臆病な子だって」私は黙って長野が話すにまかせていた。 (「一瞬の夏」)

(34)の「タブン」は、話者の近い未来に行われる出来事の予想を表しているが、話者はすでにその事態を予定として把握している。そのため、「ト思ウ」は「ダロウ」に置き換えることができない。但し「たぶん遅くなるだろうと思う」は許容されるが、この場合も「タブン」が「ダロウ」と呼応関係にあるのではなく、文全体に対する不確かさを表していると解釈される。そして(35)のように、動詞の非過去形で話者の意図を表す場合も推量の意味とは無関係であると言える。このような現象から、副詞の意味を把握するためには、共起現象からだけでは十分な答えを得られないとも考えられるが、詳しい分析は残された問題である。

以上の例から「タブン／オソラク」の基本的意味について述べる。

これらの副詞は話者の推量判断を表す「ダロウ」と共起する割合が高いが、その他にも幅広い共起関係が認められる。従来「タブン／オソラク」は「ダロウ」に代表される推量を表す副詞と規定されてきたが、その基本的意味は「不確実性を伴いながら、命題成立を主張する」ものと言える。「タブン／オソラク」が話者の記憶情報、予定として存在する事態、話者の意図などを表すという現象は、すなわち、その本質が推量ではないことを傍証するものと考えられる。

4.3. モシカスルト類

モシカスルト類[*13]は命題成立の可能性や確信の度合いという観点から「キット／タブン」と連続する副詞として処理されてきた[*14]。

本節では、モシカスルト類の共起の傾向性を提示し、モシカスルト類の基本的意味は「キット／タブン」のような蓋然性判断の副詞とは異なるということを論証する。モシカスルト類が蓋然性というスケールに収まらないと主張する根拠は、表 1 の文末形式との共起の分布が、「キット／タブン」とは明らかに違うからである。まず、表 1 で「モシカスルト」は 151 例の中 96 例(63.6%)が、「ヒョットスルト」は 114 例の中 66 例(57.9%)が「カモシレナイ」と共起する。

---

*13　モシカスルト類は、「モシカスルト」「モシカシタラ」「モシカシテ」「ヒョットスルト」「ヒョットシタラ」「ヒョットシテ」のような副詞を示す。以下「モシカスルト」は「モシカシタラ」「モシカシテ」、「ヒョットスルト」は「ヒョットシタラ」「ヒョットシテ」と置き換えが可能な形式として捉える。

*14　本稿の趣旨とは違うが、モシカスルト類を蓋然性や確信度表示の副詞と区別する研究としては、宮崎(1997)、杉村(1998)などがある。

(36) 決断が早くできるようになるというのも、もしかすると、深く考えない、という、愚かしさの結果であるかも知れない。（「太郎物語」）

(37) 「具合が悪いじゃありません？　何しろ私は主人の愛人の所にいたのですから。新聞などにも書き立てられるかもしれないし、ひょっとして私が殺したと思われるかもしれません」（「女社長に乾杯！」）

上の例の副詞は、文末に「カモシレナイ」を伴い、事態が実現する可能性も存在するという意味を表している。さらに、表 1 で「モシカスルト」は断定と共起する例も 8 例あるが、その中の 4 例は「～こともある」「～ことも考えられる」「～こともあり得る」「～かねない」がそれぞれ 1 例ずつ観察された。その他の 4 例は「モシカスルト」が条件節の中に収まっている例である。「ヒョットスルト」の場合、6 例が断定と共起しているが、その中の 4 例は「～とも限らない(2 例)」「～ことも考えられる(1 例)」「～ものでもない(1 例)」である。具体例を見ると、

(38) 喫茶店の電話を使おうと思ったのですが、その私の作った会社の共同経営者である友人も、私と同じように金策に駆けずり廻っている筈ですし、もしかしたら、ならず者に追われてどこかに逃げたということも考えられます。（「錦繍」）

(39) 「(略)となりますと、ひょっとしたら将来、わたくしども自身が刑務所にはいることも考えられますね。……」（「ぶんとふん」）

下線部の副詞は「～ことも考えられる」と結びついているが、「ことも考えられる」のような迂言的表現は、文法化の度合いは弱いものの、命題成立の可能性について言及するという意味で「カモシレナイ」に近い意味を表していると言える。

モシカスルト類と「タブン／オソラク」は、すでに先行研究で指摘されているように、蓋然性の判断に次のような違いがある[*15]。

(40) もしかすると彼は来るかもしれないし、もしかすると来ないかもしれない。

(41) * おそらく彼は来るだろうし、おそらく来ないだろう。

*15 Laurence(1976)、Michell(1976)、森本(1994)、杉村(1998)などがそれぞれ英語と日本語の副詞を対象にその違いを指摘している。

(40)の場合、相反する二つの可能性を同時に言及することができるのに対して、(41)は一つの可能性にしか言及できない。この意味で、モシカスルト類は命題成立を一つの可能性として取りあげるという意味を表す副詞であり、すべての可能性を主張する意味の「キット／タブン」のような副詞とは区別される。このような違いは文末のモダリティ形式の意味によるものとも考えられるが、副詞の意味の違いを説明する一つのテストとしては有効であると考えられる*16。

次に、モシカスルト類は「カモシレナイ」の他に、「ノデハナイ(ダロウ)カ」のような否定疑問文にも自然に現れる。「モシカスルト」は 32 例(21.2%)、「ヒョトスルト」は 35 例(30.7%)が否定疑問文と共起関係を結ぶ。たとえば、

(42) 私は眉をひそめた。もしかしたら、内藤が借金でも申し入れたのではないかと思ったからだ。 (「一瞬の夏」)

(43) もし、自分が東京の学校へ行っていなかったら、ひょっとしたら、この人といっしょになっていたのではないだろうかと、ある時、ふと思ったことさえあった。 (「路傍の石」)

(42)(43)の副詞は「ノデハナイ(ダロウ)カ」と共起し、それぞれ[内藤ガ借金デモ申シ入レタ][コノ人トイッショニナッテイタ]という事態が実現する可能性も排除できないという意味を表している。それは、「ノデハナイ(ダロウ)カ」を「カモシレナイ」に置き換えても大きな意味的な相違は生じないということからも説明できる*17。

しかし当然なことに、モシカスルト類と共起するすべての「ノデハナイカ」が「カモシレナイ」に置き換えられるわけではない。次の(44)(45)の副詞は、問いかけ性を帯びる否定疑問文に現れているが、この現象はモシカスルト類が疑問化されない「カモシレナイ」と同様な意味を持っているのではないことを裏づけている。

---

*16 この現象と関連する研究として、宮崎(1997：9)は次のような現象を指摘している。

(i) |たぶん／*もしかしたら| あの論文は間違っていると考えられる。

(ii) |もしかしたら／*たぶん| あの論文は間違っている（という）ことも考えられる。

「タブン」は他の命題が成立する可能性が想定されないのに対して、「モシカシタラ」は他の命題が成立する可能性も想定されると解釈される。

*17 「ノデハナイカ」と「カモシレナイ」の違いについては、安達(1999)を参照。

(44)「あなたねえ、もしかして、源氏の君のことをまだ思っているのじゃない？」
（田辺聖子「新源氏物語」）

(45)「汐見さんというのは、ひょっとしたらあなたと同じ部屋じゃありませんか？」
（「草の花」）

一般に、命題の真偽に関わる副詞は、疑問文には現れにくいという制約がある。但し、中右(1980)でも指摘されているように「真偽判断の副詞」は、ある一定の条件が整えば、確認要求文や付加疑問文に現れることができる。(42)から(45)の例は、その共起率に違いが見られるが、「キット／タブン」にも観察された。否定疑問文と共起する割合を比較してみると、「キット」は 8 例(1.2%)、「オソラク」は 21 例(3.6%)、「タブン」が 22 例(5.5%)である。否定疑問文との共起率を考えると、これらの副詞類の連続性を認めることも可能である。しかし、モシカスルト類が「キット／タブン」と区別される共起現象としては、次の例のように否定を伴わない疑問文にも現れ得ることである。用例数は「モシカスルト」が 8 例(5.3%)、「ヒョットスルト」が 7 例(6.1%)である。

(46) やがて河が見えてきた。そのむこうに塔が立っている。照明が当てられ、光が滝のように流れている。もしかしたら、あれがワシントンなのだろうか。
（「一瞬の夏」）

(47)（ひょっとすると、人間ではなく、神仏の化身があのとき顕じなされたのかしら）
（司馬遼太郎「国盗り物語」）

(48)「あなた、もしかすると、このマンションに入る人？」（「太郎物語」）

モシカスルト類が(46)(47)のような疑問文、あるいは(48)のような質問文(情報要求文)に出現可能なことも、一つの可能性を想定しているからと考えられる。(46)～(48)の副詞をすべての可能性を主張するという意味を持つ「タブン／オソラク」に置き換えると、いずれも不自然なものになる。

張(2000)でも指摘したように、「タブン／オソラク」は不確実性を伴いながらも、命題成立を主張する意味を表す副詞である。それに対して、疑問文は話し手が判断を下すのに不明な部分があって、判断成立への疑いの意味を表すものである。疑問文(質問文)に「タブン／オソラク」が出現しにくいということは、このような意味の食い違いが生じるからと説明できる。

以上、モシカスルト類の共起の傾向性に基づいて、蓋然性判断の副詞と区別され

る文法現象を確認した。このような事実から、本稿ではモシカスルト類の基本的意味を宮崎(1997)の「可能性の想定」に従い、「命題成立を一つの可能性として想定する」ものと捉える。但し、ここで主張したい事実は、モシカスルト類の意味は共起関係にある表現形式と同様なものではないということである。モシカスルト類は一つの可能性を想定する(仮定的に捉える)ものであり、命題成立の可能性を主張したり、疑いを表すといった文末のモダリティ形式とは、その本質が異なるものと考える。それは次の例のように、モシカスルト類が仮定条件節、あるいは仮定条件の意味の連体節に生起することからも裏づけられる。

(49) 「そうでございますねえ……もしかして、適当な折がございましたらお知らせしましょう。…」 (『新源氏物語』)

(50) ひょっとして条件があまり強力である場合には、自分のほうが負けてしまう。 (石川淳『焼跡のイエス・処女懐胎』)

モシカスルト類が「カモシレナイ」と共起する理由は、まさに命題成立を一つの可能性として想定するという意味と、「カモシレナイ」という可能性を主張するという意味的な類似性に起因するものであろう。また、可能性を取りあげるということは、結果的に命題成立に対する十分な根拠を持っていないと解釈される。モシカスルト類が持つ根拠の不十分さは、さらには(否定)疑問文との共起現象につながっていくものと考えられる。

5. まとめ

本稿では、「キット／タブン／モシカスルト」のような副詞が、無反省的に文末のモダリティの意味を把握するためのテストとして用いられたり、命題成立の蓋然性という意味で連続するといった従来の研究に対し、それぞれの副詞が持っている意味・用法をより詳しく分析すべきことを主張した。

その方法として、まずこれらの副詞類がどのような形式とどれくらい共起しているかという傾向性を把握し、その数値を提示した。その結果に基づいて、副詞の意味機能と共起現象との関わりを明らかにした。

本稿の分析で得られた副詞の意味を簡単にまとめると、まず「キット」は、「話し手の確信」「期待の気持ち」「事態の確率性」の用法を持つ多義性の副詞であるが、基本的意味は「話し手の確信的態度を表す副詞」である。次に「タブン／オソラク」

は、推量の「ダロウ」と共起する割合が高いが、記憶に内在する情報、予定としての事態、話者の意図をも表し得る点で、その本質は「不確実性を伴いながら、命題成立を主張する副詞」である。最後にモシカスルト類は、「命題成立を一つの可能性として想定する」という意味を表す副詞であり、このような副詞の意味から「カモシレナイ」や「ノデハナイカ」などの共起関係を派生させると言える。

これらの副詞の意味は、共起関係にある文末の表現形式と同様なものでもなければ、一律に蓋然性というスケールに並ぶものでもないことを述べた。今までの副詞研究は、文末のモダリティとの共起関係からその意味機能も追求されてきたが、共起現象を引き起こす要因は、副詞が持つ語彙的意味に求めるべきである。

最後に、本稿ではいわゆる推量表現と共起する代表的な副詞を考察の対象としたため、関連する他の副詞については触れることができなかった。「キット」「カナラズ」「ゼッタイニ」のような副詞の多義性の問題もあわせて、副詞の意味や位置づけなどの問題は今後の課題とする。

参考文献

安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

呉　珠熙(1999)「「きっと」「かならず」の意味・用法」『筑波応用言語学研究』6、筑波大学 文芸・言語研究科 応用言語学コース

奥田靖雄(1984, 1985)「おしはかり(一、二)」『日本語学』3-12, 4-2

工藤　浩(1982)「叙法副詞の意味と機能－その記述方法をもとめて－」国立国語研究所『研究報告集 3』秀英出版

工藤　浩(2000)「副詞と文の陳述的なタイプ」森山卓郎、仁田義雄、工藤浩著『日本語の文法 3 モダリティ』岩波書店

小林幸江(1980)「推量の表現及びそれと呼応する副詞について」『日本語学校論集』7 号、東京外国語大学外国語学部付属日本語学校

澤田治美(1978)「日英語文副詞類(Sentence Adverbials)の対照言語学的研究－ Speech act 理論の観点から－」『言語研究』74 号

杉村　泰(1998)「真偽判断を表すモダリティ副詞「モシカスルト」,「ヒョットスルト」の研究」『日本語教育』98 号

田野村忠温(1990)「文における判断をめぐって」『アジアの諸言語と一般言語学』三省堂

張　根壽(2000)「判断文の構造と副詞について－副詞とモダリティ形式との共起関係を中心に－」『日本語文學』12 輯、韓国日本語文學會

寺村秀夫(1984)『日本語のシンタクスと意味Ⅱ』くろしお出版
中右　実(1980)「文副詞の比較」国広哲弥(編)『日英語比較講座』第2巻、大修館書店
仁田義雄(1989)「現代日本語のモダリティの体系と構造」仁田義雄・益岡隆志編『日本語のモダリティ』くろしお出版
益岡隆志(1991)『モダリティの文法』くろしお出版
南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店
三宅知宏(1995)「「推量」について」『国語学』183集
宮崎和人(1997)「「モシカスルト」類について」『岡山大学言語学論叢』5、岡山大学
森田良行(1988)『基礎日本語辞典』角川書店
森本順子(1994)『話し手の主観を表す副詞について』くろしお出版
森山卓郎(1995)「ト思ウ、ハズダ、ニチガイナイ、ダロウ、副詞～φ－不確実だが高い確信があることの表現－」『日本語類義表現の文法(上)』くろしお出版
矢澤真人(2000)「副詞的修飾の諸相」仁田義雄・柴谷方良・村木新次郎・矢澤真人著『日本語の文法1 文の骨格』岩波書店
Greenbaum, Sydney. (1969) Studies in English Adverbial Usage. London : Longman
Laurence R. Horn. (1976) On the Semantic properties of logical operators in English. Indiana University Linguistics club : Bloomington, Ind
Michell, Gillian. (1976) Indicating the Truth of Proposition : A Pragmatic Function of Sentence Adverbs : Papers from the 12th Regional Meeting of the Chicago Linguistics Society
Quirk, R., S. Greenbaum, G. Leech, and J. Svartvik. (1972) A Grammar of Contemporary English. London : Longman

(2001年6月28日 受理)